

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00314

研究課題名(和文) 明治・大正期文学における進化論・退化論パラダイム表象に関する総合的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Study of Evolutionary and Degenerate Paradigm Representations in Meiji and Taisho Period Literature

研究代表者

石原 千秋 (Ishihara, Chiaki)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：00159758

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：進化論はその趣旨から言うなら「変化論」でもよいはずだが、進化論と称されることで政治的意味を帯びることになった。その極端な例が社会進化論であり、それらの反動としての退化論である。一方、進化論が経済と結びついたのが資本主義であり、新しいモノはほぼ無前提でよいモノとされた。資本主義体制下では「できるだけ多くのモノを、できるだけ遠くに、できるだけ速く」運ぶことが求められる。小説の主人公の型としては移動する「物語的主人公」がふさわしいが、たとえば漱石文学では移動しない「小説の主人公」が多く登場する。漱石文学の主人公は速さへの恐れを抱いている。速さに対する感性が進化論と退化論の表象と考えることができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

漱石文学の登場人物は「速度」を恐れている。これは思想ではなく、感性の表象である。近代は「できるだけ多くのモノを、できるだけ遠くに、できるだけ早く運ぶこと」を目標にしてきた。現代はこれに「情報」が加わり、ポスト現代はこれにさらに感染症が加わるのだろうか。私たちはまさに感染症によって退化論的存在であることを強いられている。速度を恐れるのはノルダウのいう「疲労」に相当する。退化論の人物である『明暗』の津田由雄はポスト現代を生きる人間かもしれない。津田は単なる俗物ではなく「新しい人間」である。文化の中に散乱している退化論の表象を意味づけて、進化の裏側にある退化の側からポスト現代の姿を明らかにした。

研究成果の概要(英文)： Evolutionary theory could have been dubbed "the theory of change" simply for its own sake, but by adopting the name "evolutionary theory," it assumed a political connotation. An extreme manifestation of this is seen in the theory of social evolution, and the theory of degeneracy emerging as a reaction to it. On the contrary, the theory of evolution became intertwined with the economy, particularly through capitalism, where novelty was often equated with goodness with minimal prerequisites. Within the capitalist framework, the imperative was to transport "as many things as possible, as far as possible, and as fast as possible." The archetypal protagonist for a novel is the mobile "narrative protagonist," yet in works of Soseki literature, for instance, numerous "novel protagonists" remain static. The protagonist in Soseki's literature is characterized by a fear of speed. Sensitivity to speed can be interpreted as a representation of both evolutionary and degenerative theories.

研究分野：日本近代文学

キーワード：進化論 退化論 物語的主人公 小説的主人公 速さ 象徴界 視線恐怖症 資本主義

1. 研究開始当初の背景

退化論は、ヨーロッパ世紀末の「退廃的」な文化を批判した、マックス・ノルダウ『退化』(1897年)という一種の奇書から生まれたパラダイムである。実は、退化は進化の一部でしかなく、そこに価値判断は入らない。更科功によれば「退化」の反対は、「進化」ではなく「発達」である。「退化」は「進化」の一種(『進化論はいかにして進化したか』2019年)である。ただし、ダーウィンの突然変異説によるなら、環境に適応するために突然変異説したのではなく、突然変異説したものが偶然環境に適応したにすぎないのだから、「進化」という価値観を含む用語ではなく、「変化論」として理解すべきだった。

「進化」という価値観が入ったために、ノルダウはダーウィンの進化論を誤読するか曲解するかして、進化の反対の退化が起きるとして、人類が退化して精神が荒廃すればそれが外見に現れるとしたり(これは当時ヨーロッパで大流行して、人種を見分けて「差別」する指標ともなった「骨相学」を踏まえている)、退化によって人類はある種の女性化が起きるとしたりした。もちろん、女性差別を前提とした論である。もちろん、現代社会では「退化論」という言葉は忘れられている。しかし、パラダイムが最も有効に機能するのはそれが忘れられたか無意識化されたときなのである。現代社会も退化論パラダイムに汚染されていると言っていい。たとえば、子供を産めない女性を「生産性がない」と非難することは、まさに退化論パラダイムの表象そのものである。進化論と退化論はコインの裏表の関係にある。

ロンドンに留学して人種差別を経験した夏目漱石がノルダウの『退化』を熟読したことは、小倉脩三によって確認されている(『漱石の教養』2010年)。現代社会を覆っているのはスペンサー流の社会進化論パラダイムだとよく言われる。それはまちがってはいないが、もっと生物学的レベルのダーウィンの進化論パラダイムとそれを誤読して成り立ったノルダウ流の退化論パラダイムも現代社会の底流を流れているのではないだろうか。それはどのような表象として現れているのか。そのことを、退化論パラダイムの表象を書き込んだ漱石文学を手掛かりにして明らかにしたいというのが本研究の根本にある問いである。

2. 研究の目的

本研究は、相互に深く関係づけられる二つの目的を持っている。

第一は漱石文学を進化論・退化論パラダイムから読み、同時代の中に意味づけること、第二は近代の生成期である明治・大正期に進化論・退化論パラダイムがどのように形成されて浸透し、どのような表象を生んだかを明らかにすることである。

漱石が近代批判をし続けたと捉えることはもはや定説の感がある。ただし、その多くはスペンサー流の社会進化論批判のレベルで捉えられている。その好例が、近代文明批判を展開した『現代日本の開花』を漱石の近代批判の中心とする捉え方である。その典型は「生存競争」批判である。しかし、漱石文学の批判は社会進化論パラダイムのレベルだけでなく、ダーウィンの進化論パラダイムのレベルにも及んでいるのではないだろうか。たとえば、近代家族と家制度は「男女の性役割分担」によって成り立っているが、この「男女の性役割」こそが生物学を基礎にしているからである。生物学が基礎となって男と女は体の仕組みが違うから、社会上の努めも違うという言葉が進化論という科学的な根拠をもった思想として語られるようになった。「科学」とか「学問」が絶対的な権威を持っていた時代にあって、進化論パラダイムから見ると、良妻賢母思想は儒教的な古さと、生物学=進化論という当時の最先端の「科学」の裏付けを持つ新しさとの複合体だったことが明らかになる。これは一例に過ぎない。進化論パラダイムの観点から見

るなら、当時の思想・表象の意味が分かり、大衆の感性により近づけるだろう。

退化論パラダイム導入の意義について述べたい。

3. 研究の方法

進化論・退化論研究に関する研究を収集して参照して知見を深めながら、明治・大正期の進化論受容の広がりについて同時代資料を収集する。中心は文化だが、法律や政治制度や産業や教育などについても、それぞれの研究を参照しながら、資料を収集する。幸いこの時期に関しては20年かけて3000冊程度の雑書を収集しており、漱石が小説を掲載した時期の朝日新聞のコピーもすべて終えているが、不足している書物(古書)は購入し、また国会図書館でPDF化された書物をコピーする。ただ雑誌・新聞関係が弱いので、これらの収集を中心に行う。収集を続けながら、ひたすら資料の読み込みに徹する。これまでの漱石にする研究で、進化論関係や家族制度や女性問題に関する書物はかなり読み終えているが、それ以外の分野への広がりが本研究のカギとなるので、徹底して読み込みたい。

4. 研究成果

漱石文学の書く家庭には、自伝的な『道草』のような例外はあるが、なぜ子供(特に跡取りとなる男子)がいないのか、なぜ親密な夫婦が書かれないのか。また、少数の例外はあるが、なぜ漱石文学の男性主人公たちは東京帝国大学を出ながら、いわゆる「高等遊民」ばかりなのか。前者については、親密さによって成り立つ近代家族も、法人のような家制度も否定することで近代を批判していたのだと論じられてきた。後者については、はやくに山崎正和が「じつに豪華な人間能力の浪費」(『淋しい人間』『ユリイカ』1977年11月)と評している。近代国家による有為な人材養成への批判だと論じてきた。いわば思想を論じていた。しかし、これらはまさに退化論の表象だと言える。

『行人』の長野一郎は科学がもたらす「速度」を恐れている。これは思想ではなく、感性の表象である。近代は「できるだけ多くのモノを、できるだけ遠くに、できるだけ早く運ぶこと」を目標にしてきた。漱石が批判し続けたのはこういう近代である。現代はこれに「情報」が加わり、ポスト現代はこれにさらに感染症が加わるのだろうか。私たちはまさに感染症によって退化論的存在であることを強いられている。そこに可能性はないのだろうか。これらは退化論パラダイムから見れば説明がつく。後継ぎがないことは進化の妨げであり、「高等遊民」は退廃した人間であり、速度を恐れるのはノルダウのいう「疲労」に相当する。彼らは「痔」という病によって寝ていることを強られる退化論的人物である『明暗』の津田由雄のように、ポスト現代を生きる人間かもしれない。津田は単なる俗物ではなく、「新しい人間」である。

中級エリート層男性をマーケットに定めた朝日新聞社の専属作家となった漱石は、彼らが憧れるような東京帝国大学の出身者を主人公とする小説を書き続けた。思索する小説的主人公こそが、近代文学では商品価値を持つことを見ぬいていたのだろう。漱石は専属作家なのだから、反=資本主義的主人公が商品価値を持つことは、わかっていたはずだ。それは日本の目標だったイギリスで学んだことだったろう。どんなに反発しようとも、漱石は大英帝国で近代とは何かを学んできたのだ。『行人』の長野一郎の言葉を引こう。

「人間の不安は科学の発展から来る。進んで止まる事を知らない科学は、かつて我々に止まる事を許して呉れた事がない。徒歩から俥、俥から馬車、馬車から汽車、汽車から自動車、それから航空船、それから飛行機と、何処まで行っても休ませて呉れない。何処まで伴れて行かれるか分からない。実に恐ろしい」(『塵労』三十二)

長野一郎は科学を人間の外部にあるかのように語っている。しかし、科学は人間の営みなのだ。つまり、科学は人間の内部でもあり外部でもある。これが、「さまざまな約束事(コンヴェンション)や限界のシステムに埋め込まれた存在」でしかないという意味である。長野一郎の恐怖は速さへの恐怖である。

先に挙げた『ドラキュラ・シンドローム』の恐怖には感染症への恐怖もあげられていた。たとえばコロナウイルスはずいぶん速く拡散し、世界中を駆け巡った。人々はその速さと広さに戸惑っていた。しかし、まちがえてはいけない。ウイルスは自分では動けない。速いのは人間なのだ。人間はいま自らの速さに戸惑っていたのだ。

近代という時代は「できるだけ多くのモノを、できるだけ遠くに、できるだけ速く運ぶこと」を明確に目標に定め、その成功によって作り上げられた。もちろん、人類はずっとそうして来た。それが蒸気機関によって、人間の感覚を超えて加速したのが近代だった。それはたとえば蒸気船であり、鉄道だった。シヴェルプシュ『鉄道旅行の歴史』(加藤二郎訳、法政大学出版局、一九八二年)は、人々が鉄道の速さに戸惑いながら、しだいにそれに魅了されていく過程を論じて余すところがない。そこで、こうなる。「十八世紀の旅行小説は、十九世紀初頭には教養小説となる」と。初期の鉄道は単線だったから、どこかで上りと下りがすれ違わなければならない。そこで、時間厳守と遅刻という概念が庶民にも広がった。人々の間で速さによる感性の変革が起き、速さを人生に組み込むことに成功したのである。夏目漱石『三四郎』に代表される数多くの上京小説を思い浮かべるだけで、このことが理解できるだろう。

日本でこのような感性の変革に気づいた一人が横光利一だった。一九二三年の関東大震災後の復興について書いた一節。「目にする大都會が茫茫とした信ずべからざる焼野原となって周囲に広がっている中を、自動車という速力の変形物が初めて世の中にうろろうし始め、直ちにラジオという音声の奇形物があらわれ、飛行機という鳥類の模型が実用物として空中を飛び始めた。これらはすべて震災直後わが国に初めて生じた近代科学の具象物である。焼野原にかかる近代科学の先端が陸続と形となってあらわれた青年期の人間の感覚は、なんらかの意味で変らざるを得ない」(「解説」『三代名作集』)と。大都市では大衆消費社会が急速に拡大していった。文壇が横光利一たちに与えた新感覚派は正しい呼称だった。それは教養小説の崩壊でもある。教養小説とはすでにある価値観に到達するまでの物語だからである。

こうして現代が始まった。現代という時代というのは「できるだけ多くの情報を、できるだけ遠くに、できるだけ速く運ぶこと」を明確に目標に定め、その成功によって作り上げられた。速度をもっとも必要としたのは戦争である。ポール・ヴィリリオは戦争論の中でこう言っている。「西欧の人間が到底多いとは言えない人口にもかかわらず優越性をもち支配的であるように見えたのは、より速い者として現れた」からで、わけてもイギリスの優位性が確立したのは「産業革命」ではなく「速度の革命」が、民主主義ではなく速度体制が、戦略ではなく速度術が存在した」からだと(『速度と政治』市田良彦訳、平凡社、一九八九年)。オルテガ・イ・ガセットはこう言っている(『大衆の反逆』佐々木孝訳、岩波文庫、二〇二〇年)。「イギリス民族は、常に未来を先取りし、ほとんどすべての領域にわたって一番乗りをしてきた民族なのだ」と。近代日本がイギリスから学んだのもこのことだった。そして、これが夏目漱石『行人』の大学教授・長野一郎があれほどまでに科学と速度を恐れる理由ではないだろうか。漱石が留学したのは、まさに速度の帝国を築いたヴィクトリア女王が亡くなったときだったのだから。漱石は速度とその未来と終わりを見てしまったのだった。つまり、進化と退化を見てしまっていたのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 石原千秋	4. 巻 90号
2. 論文標題 令和文学年表は可能か	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 季刊文科	6. 最初と最後の頁 pp56 ~ 59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石原千秋	4. 巻 第22号
2. 論文標題 高度経済成長期とバブル期と文学研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 物語研究	6. 最初と最後の頁 p 104 ~ p 119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石原千秋	4. 巻 106号
2. 論文標題 先生は何を恐れているのか - 夏目漱石『こころ』論 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本病跡学雑誌	6. 最初と最後の頁 p 29 ~ 40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石原千秋
2. 発表標題 高度経済成長期とバブル期と文学研究
3. 学会等名 物語研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石原千秋
2. 発表標題 先生は何を恐れているのか - 夏目漱石『こころ』論 -
3. 学会等名 日本病跡学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 石原千秋	4. 発行年 2023年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 256
3. 書名 教科書の中の夏目漱石	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------